

## 山崎弁栄の思想

山崎弁栄（安政六年一八五九—大正九年一九二〇）は光明会の会祖、如来光明主義の主唱者として知られ、浄土宗義の現代化につとめた先駆的位置を占める宗教者・思想家である。

彼は安政六年二月二〇日千葉県東葛飾郡沼南町鷺谷の農家山崎嘉平・なをの長男として生まれた。幼名は啓之介、山崎家は関東十八檀林の一つ松戸市小金の東漸寺の末寺である天王寺の檀家で、父は念仏嘉平といわれた程の念仏者であった。はじめ農作業に従事し、寸暇を惜み内外典や高僧伝を読み、十九歳のとき、道心やみがたく独りで断髪し、二十一歳のとき、医王寺で東漸寺の大谷大康を誠師として得度し、弁栄と改名した。大康の弟子として東漸寺に移り、作務の寸暇に念仏と関蔵に励んだ。八一年東京に出て芝学寮で大谷良胤について宗乗を、浅草日輪寺で卍山実弁について余乗を学んだ。この頃、すでに難解とされる仏教の哲理を、理論的に理解したのみならず、実践を通して、これを体得すべく明治十五年（一八八二）二十三歳の夏、筑波山に登り二カ月に互つ

藤 吉 慈 海

て口称念仏三昧に入った。その時のことを、「常陸国筑波山麓より一里半ばかりか、山頂より二丁ばかり雨の方にて立身石という巖窟あり。此処にあつて凡そ一ヶ月、次に場所をかえて一ヶ月。身に纏う処は半素絹、食物は米麦、そば粉などにて。大きな山なれども夜分は山中一人にて、まこと静閑にて三昧を修するには最適当にて候」と述べている。さらにその時の心境を、

真空に偏せず妙有に執せず、中道にあつて、真善微妙の靈天地にたましいを栖すまし遊ばすに、還念の如来三力加被をたれたもうところの心の扉すなわち開けて、無辺際の浄土に、無量寿如来了々と現前し給う。

聖きしめしをこうむりて心の知見は開けたり、報仏不思議の境なる華藏世界はあらわれぬ。金銀瑠璃摩尼莊嚴の照り輝くこときはみなし。

阿弥陀無量光王尊

身色金山王のごと相好円満し給いて六十万億河沙由旬。

有無を離れし中道に慧光大悲に輝けり。塵々法界照り合いて功德莊嚴きわもなし。

と述べている。さてこの念仏三昧円かな成就の時の偈に、

「弥陀身心遍法界 衆生念仏も還念

一心専念能所亡 果満覚王独了々」

というのである。このような宗教体験は浄土教神秘主義を代表するもので、浄土教者の宗教体験としては注目すべきものである。

その念仏三昧の体験については、いろいろ説明しているが、

口に称名を唱え意を專注して弥陀を念じ、漸々に余の雑念も薄らぐ。念ずる所の弥陀に神を投じ、弥陀が我が、我が弥陀かと離れぬ精神状態に入って完き調和の成りし所を即ち三昧という。

……第一に入神を大切にすべし。入神とは自己の識神を弥陀の靈中に投ずるなり。真に自我を如来の靈中に入る時は余念全く亡じて恰も蟬の脱殻のごとく、而して識神は弥陀の靈中に清き声を揚ぐるなり。……思惟とはその仏の相好等を想像に浮べる辺をい、正受とは自己の靈性が発達して三昧も成熟せし故、法眼が開けて直覺的に靈像が顕現する了々たる辺をいうものにして、これ凡夫の想像の及ばざる所なり。……念仏三昧の思惟を階級として正受に入る。……弥陀に入神の着眼点……正鵠を捉びて心々連続して神をその中に入るなり。動すれば、雑念妄念群り出でて正

山崎弁栄の思想（藤吉）

境を乱さんとす。意思を凝して正鵠に向わしむ。要は一心統一して弥陀の靈中に神を入るるなり。……心々相統するに勇猛精進に身を責め己を推きて靈性を發揮す。……一心に念仏する窓には弥陀の靈光射し来る。春風徐ろに吹きて和氣霽々と流るる三昧の兆候靈性に現す。……この時の歓喜天地に充つ。……如来に乗り得たる心は無我なり。……身心共に輕安を覺えて即ち我が有を感じず。……心が漸々微に入り妙が加わり弥々心靈の日光が顯れ来る。……如来が我となりしや我が如来となりしや。……三昧入神の妙味ここに在り。……この心靈の花開く、弥陀の靈底正しく我靈性と合体す。……漸々純熟するに随つて竟には注意を要せずとも自ら三昧を成するなり……。念仏三昧を以て業事成弁する時は身はこの土にありながら、既に弥陀の種子をその人の心靈に成熟するを以て……その中心より起る三業の所作は悉く仏心仏行となるなり。

この法語によって山崎弁栄の念仏三昧がいかなるものであるか推定される。その著『宗祖の皮髓』にも述べているように、山崎弁栄の宗教体験は宗祖法然の宗教体験と同一のもので、法然の真髓は山崎弁栄の真髓となったと見ている。宗祖の皮相でなくその真髓に触れることが大切であると主張した弁栄は、念仏三昧の境地の表現にも、法然の有名な

あみた仏と心はしにうつせみのもぬけ

はてたるこゑすすゝしき

の和歌に由来するところがある。

このような念仏三昧の体験にもとづき、山崎弁栄は浄土宗の教えを、可なり自由に改組したと言えよう。この自由な態度は求道者のもつ共通の傾向であるが、彼は浄土宗の宗義にこだわることなく、新しい組織を構想している。また彼が依用した仏教々学の用語にも、自由な解釈を加えていることが注目される。

浄土宗の宗義は、徳川期に入るといわゆる檀林教学が固定化して、宗義も凡入報土、万機普益、報身報土、現当二世の利益、安心決定、未來往生、指方立相、口称念仏、等にその特色が発揮されたが、弁栄教学においては、現世における念仏三昧を強調し、如来の光明摂化による靈的人格の完成に中心があり、その完成へのプロセスが念仏七覚支や十二光体系として説明された。その念仏七覚支は仏教々学における七覚支を念仏三昧の体験によって換骨奪胎し、念仏修養の内的過程の説明に用いている。

なお、その体験の境地を端的に表現したものととして「念仏者の心本尊は六十万万億の奥行きの堂」というのがある。また年代は不明であるが、空海が入唐前に修したという虚空藏求聞持法を修したといわれる。これは『三教指帰』によると記憶力を増大する法である。

さて山崎弁栄の思想の特色は、浄土教神秘主義と言える

が、その宗教観として注目すべきものがある。すなわち

「宗教が未開の時代より開明に進むに随て、自然に階級あることは曾て御話いたせしこと存候なれども、世界通じて三階にわかづ。初、自然教、二、超自然教、三、円具教。自然教は幼稚なる知識の時代の宗教。神は自然界の日月山河八百万神等を崇拜し、而してかたちの上の幸福を祈りて、後生とか死後の幸福は未だしらす。我日本の神道また仏教にても平安朝に開きし真言天台等は即現世主義である。現世いのりの宗教を自然教と云。次に世間の文化と宗教と共に進んで、鎌倉時代に発りし超自然教は、浄土教の如き、現世は夢幻のしばしのほど、未來遠き極樂に生れてこそ真の幸福は得らる。さればとても此世は仕方ないから、未來死してのち極樂まいるの念仏また信心、あみださまでも此世はしかたがなしというのか、此自然界を超たるむこうに望を立るが超然教である。ただ肉体の幸福を求めず、靈魂の救を専らにす、即ち浄土宗真宗等の主義是なり。世の文化と共に進みて当に真の宗教世に出んとする。是ぞ円具教即ち如来光明主義である。其予言者は即ち仏陀禪那である。予言とは此より将来は斯主義に依て救の道をなすちよう、今日にして将来の宗教を世に紹介するもの謂なり。故に予言者は旧来の宗教家には憎嫉せらるる蛇蝎視せらる。釈迦、キリストにしても、また法然、日蓮にしても、或一部の人には歓迎せられ、一部の人には憎まれし、妨害加えられし。此免れ難き理である。さて円具教の如来光明主義は客体の如来を必しも遠き彼岸に置かず、十方法界悉く活る如来の大大光明中である。

但し衆生煩惱に障られて、之を知見すること能わず。然れども信心徹到すれば、如来の心光と衆生の信心とは三昧一致して、光明を発得することを。人の天然即ち生れたままの意識は本より劣等なり、無明なり、罪惡なり、心光獲得して始めて靈格となる。光明中の人と更生す。更生即ち往生なり、精神の更生である。更生したる後といえども煩惱なきに非ず。然れども光明によりて自己を制裁するに力あり。また苦惱なきにあらず、苦惱あればこそ歆喜光を仰ぐの要あり。常に罪惡苦惱と健闘して、不断光によりて勇氣を鼓舞し、此生涯は煩惱と奮闘の生活である。已に靈化しぬれば、昨日までの苦もまた苦と感ずるほどのことなし。此土一月は浄土百歳より勝れたり。何ぞ夫れ何の苦かある。今は理想の浄土に在りて生活し、而していよ／＼命終らば実在の浄土に生ず。斯の如きは是精神的光明主義である。仏陀禪那は光明主義の予言者である。」<sup>(6)</sup>

と述べている。これを見ると真言・天台は現世主義で自然教であるとし、浄土宗・真宗は未来主義で、この自然界を超えた向うを望むから超自然教で、これは肉体の幸福を求めず靈魂の救を専らにする教と批判している。これに対し彼の主張する円具教は如来光明主義で、客体の如来を必ずしも遠き彼岸におかず、十方法界悉く生ける如来の天心光明中であるとする。そして信心徹到すれば如来の心光と衆生の信心とが三昧一致して、光明を發得することができるとしている。山

崎弁栄の浄土宗・真宗に対する批判はいわば俗流浄土教への批判であって、必ずしも当を得ていないが、その円具教なるものは法然浄土教の真髓を新しい表現をもって組織的に解明したものと自覚を持っていたようである。なお彼が主張した十二光体系や念仏七覚支については、改めて考察し、その宗教思想をさらに詳わしく検討して見たいと思う。

- 1 『慈悲のたより』中巻。
- 2 『日本の光』（弁栄上人伝）五九・六〇頁。
- 3 山本空外「山崎弁栄の宗教体験」（拙編『浄土教における宗教体験』所収）を参照されたし。
- 4 『日本の光』（弁栄上人伝）六三・六四頁。
- 5 同右 七三頁。
- 6 山本空外編『辨栄上人書簡集』三〇三―六頁。  
なお、この原文は明治四十五年五月五十四歳のとき筑後の善導寺より渡辺千代子様への書簡の一節である。

（花園大学教授）